



写真1 定国古墳1号陶棺



写真2 石山4号墳陶棺



写真3 定国古墳2号陶棺

陶棺の装飾

宇垣 匡雅

陶棺は古墳時代後期の吉備を特徴付ける考古資料である。岡山県立博物館には、破片を含めればある程度の数の陶棺が収蔵されている。ここではそのうちのいくつかを紹介し、観察の所見を記す。

一 赤磐市石山四号墳出土陶棺

図1に示したのは赤磐市尾谷に所在した石山四号墳出土の陶棺である。大正一一（一九二二）年に開墾中に出土した資料とみられ、『改修赤磐郡誌』には須恵器杯・壺・平瓶、土師器、鉄刀、金環、勾玉・管玉・小玉等が伴出したことが記される（赤磐郡教育会編一九四〇）。出土後、当時の県郷土館に収められ（永山一九三〇）、後に県立博物館に管理替されたという経緯である。なお、石山四号墳は同六号墳に続いて昭和五一（一九七六）年に町道建設工事に際して発掘調査が実施されているが（神原一九七八）、同じ古墳であったのかどうかわからない。

石山古墳群は砂川中流域の平野に面した低丘陵の南斜面に形成された群集墳で、現在二基が遺存するのみであるが、元はある程度の数であったとみられる。

陶棺の形状

土師質亀甲形陶棺である。身はほぼ完形で、蓋はいくつかの大形破片からなり一部に欠損がある。蓋のうち一方は接合復元してあったものが接合部ではずれた状態であったため、断面観察のち元の復元にもどした。蓋の幅が広がった形状で復元されているが、修正作業が簡単ではないためその状態で実測し、トレース時に修正した。ゆがみを完全に解消するには至らず、資料紹介に支障をきたすほどではないが、図の一部に不備が残る。

身・蓋ともそれぞれ二つに切断されている。長さ一九七cm、幅六七cm、高さ九二cmである。

脚を含めた身の高さは六三cm前後、平面形は隅丸長方形で箱形に近い。蓋との切断面は側面側では平滑な面をなすが、小口側では図1拓本に示すように少しずつ切っている。

身・蓋外面と身の内面はナデで平滑に仕上げられるが、底面外側は粗いユビナデ、蓋内面天井部は板状工具によるナデと粗いユビナデである。

脚は二行六列で、脚部の下半にはタテハケが見られる。

蓋は高さ三一cm前後で、身から水平に切断して形成される。稜線の突帯から下に向かう突帯が側面に六本ずつ、小口部に一本配される。これらのうち小口部の突帯と側面片側三本のうち中央のものは突起にあたって終わるが、他は蓋下縁の突帯に接続する。蓋の合わせ部両側では突帯の間隔が狭くなる。図右側、かぶせ部に接する突帯は下端が尖って下縁の突帯のわずか上で

終わり、これの上端は合わせ部をこえてかぶせ部側に広がる形になる。突帯は幅6cm、高さ8mm前後である。受け部側蓋の欠損箇所に近い位置では突帯がないが棒状に色調の変化が認められ、貼り付けられた突帯が剥離したとみられる。

片側六つの突起は断面が台形であるが、上端は丸みをもつ。蓋の切断後にかぶせ部を形成しており、かぶせ部は切断面の上部を覆う。また、かぶせ部内側には木葉の跡が残る。かぶせ側蓋の内面両側には直径約9cmの封じ孔があり粘土を詰めてふさいである。

鐘方氏の分類（鐘方二〇一八）にもとづけば美作六突起系陶棺で、一部の突帯が突起と連結しており半独立系に区分される。七世紀前半頃に位置づけられる。

製作痕跡

脚の上端は上から粘土を詰め込んでふさぐが、平面図の右上隅になる脚だけはナゲ調整がなされた底面に脚上端をはめこんでいる。

破面を観察できたかぶせ部側の蓋では、器壁内に円孔が認められた。細竹等を蓋製作時の補強材として用いた痕とみられる。円孔の直径は9mm前後で、頂部付近ではかぶせ部に近い位置とそこから小口側に二〇cm離れた位置にあり、これらは陶棺の長軸に対して直交する。また、下の切断面近くとそこから二六cm上のは長軸に平行する。それぞれを確認した位置と断面の位置は若干異なるが、縦横の断面に示した。細いワイヤー

で測った孔の全長は長いもので八五mm、他は以前の接着のため破面の両方向に測れず一方のみであるが、その数値よりも短い長いものを折り曲げるなどしているためワイヤーが止まってしまいそれ以上の計測ができないのか、本来短いのか不明である。

また、内面にも二箇所器面に直交する円孔がある。直径一〇mmで、深さは8mmと一〇mmで浅い。これは蓋部の支柱として用いた細竹の先端がめり込んだのではないかと思われる。このほか、内面には幅二九〜四二mmの細長い板を縦断方向に当てた跡が残る。一方の端が明瞭でないため板の全長は不明ながら、最も長いもので一六・五cmである。かぶせ部に近い側では三つが六〜一五cmの間隔で認められ、それらの小口側でも間隔は六〜三三cmとばらついて同様に三箇所に見られる。

二 定国古墳出土陶棺

定国古墳は美咲町の中央部、旧中央町の打穴北に所在する。古くに石室が開口し、陶棺の存在が知られていた。『岡山県通史』には石室長さ一三尺（三・九m）、幅六尺（一・八m）と記される（永山一九三〇）。一九二三年刊行の『久米郡誌』は破壊された石室内に陶棺三個が残るとする。また、この古墳の陶棺には「一面に輪を施している」と記すが（久米郡教育会編一九二三）、以下に示す一号陶棺・二号陶棺の竹管文を指すとみてよい。このほか、『中央町誌 地区誌編』では古墳は一九二〇年頃の村道開設の際に発見され、陶棺六基が所在したとす

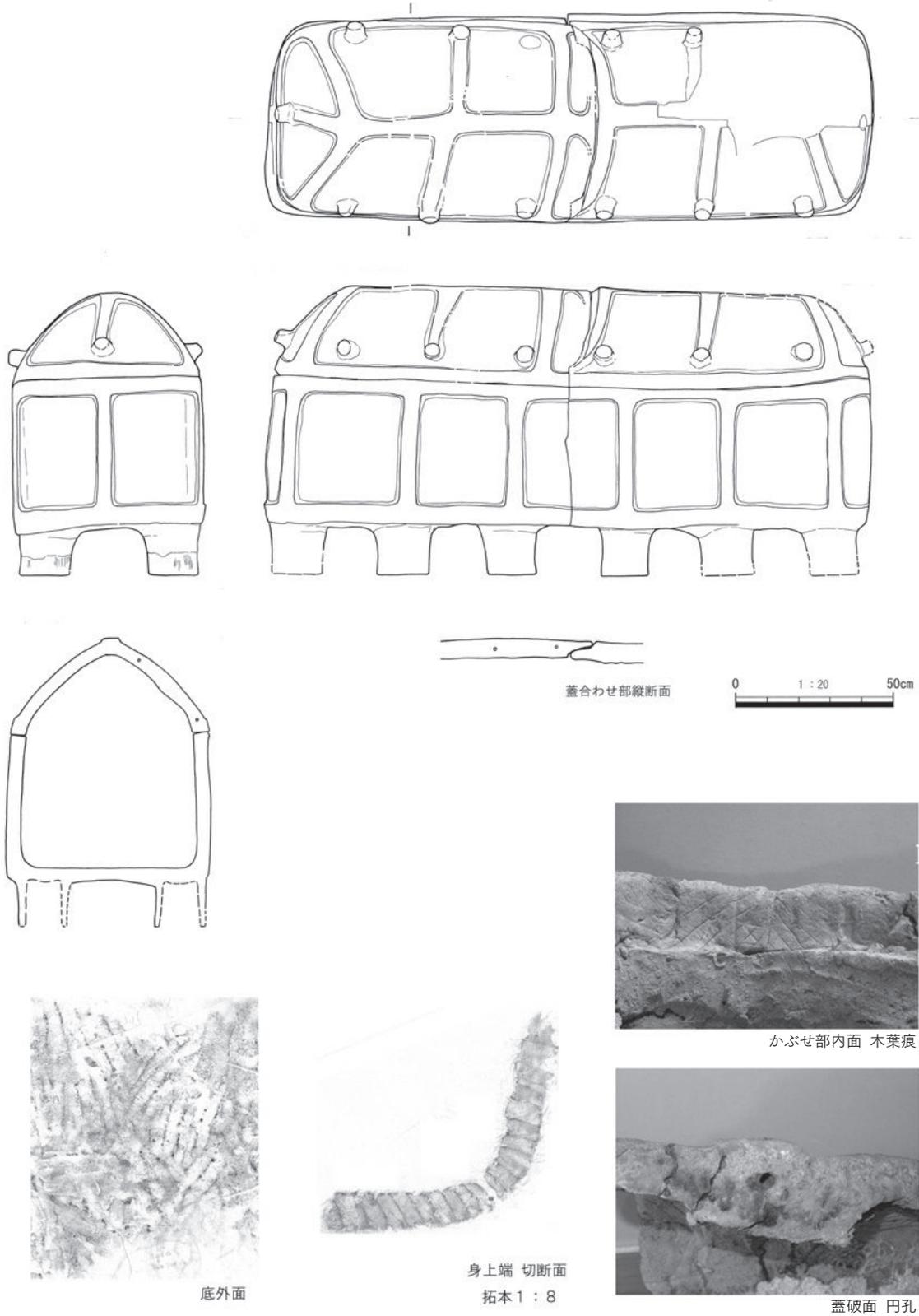


図1 石山4号墳出土陶棺 1:20・1:8

る（美咲町史編さん委員会ほか二〇一八）。

小平野の谷奥、南向きではあるが谷川に面した山麓の狭隘な場所に単独で所在する。

資料が当館にもたらされた経緯はあまり明らかでない。一個体のまとまった資料と若干の破片があり、一〇四号陶棺として示す。いずれも土師質亀甲形陶棺である（図2）。この古墳の陶棺資料は美咲町教育委員会にも収蔵されており、報告資料と同一個体の破片を含む。

一号陶棺

それぞれ二つに分割された身・蓋のうち、一方の側の身は上部の大部分が遺存せず、蓋もかぶせ側の大形破片等であるが、もう一方の身・蓋は大半が残り全体の形状を把握することができる。この陶棺の略側図は『吉備の考古学的研究』の集成（村上・杉山一九九二）に掲載されるが、古墳の所在を津山市とするのは誤記である。

長さ一九八cm、幅六二cm、高さ九六cmである。

身の平面形は隅丸長方形で細長い。脚を含めた身の高さは六五cm前後である。身側面は太い粘土紐を内外から交互に積み重ねて形成する。身の突帯は幅五〇八cm、高さ八mm前後、突帯の斜面は緩やかで下端は総じて不明瞭である。貼り付けで形成されている。身の内外面ともに丁寧なナデで仕上げる。

身の左半側面は乾燥時に内側に湾曲したようで、垂直の切断部を隔てた右の側面と傾きが若干異なり、身上端幅は復元でき

る蓋の幅よりも狭い。右側面の形状から側面はある程度内傾するとみられるが、台形をなす左側小口立面および横断面形は乾燥時の変形も加わったものと思われる。資料の遺存状態の関係で平面図では立面図側で身と蓋を合わせたが、古墳で用いられた際にはどうか蓋が身に乗るといった状態であった可能性が強い。

脚は二行六列一二本で、下半には粗いタテハケが見られる。脚の上端は内側に粘土を補充して内径を狭め、その中に粘土塊を詰めてふさいでいる。

蓋は形態・装飾とも特異である。身・蓋に分割される突帯が左の小口側に上がっているため、蓋の高さ（本体部分）は二二〇二九cmとばらつくが、低めである。小口側各一、側面各四個の突起が設けられる。突起は山形で差し込みである。突帯は頂部から各突起の方向に向かうものと小口・側面の境を通るものがある。また、左の蓋ではそれらのほか側面に突帯が加わるが、右のかぶせ側の蓋には対応する位置に設けていない。かぶせ部上には細い突帯を設け、受け部側は下端しか遺存しないが幅が広くて下端が尖る形状の低い突帯を設ける。それらを別にすれば突帯は幅は七cm前後で、断面形は低い半月形に近く上面を画する稜は不明瞭である。突起を通る突帯は突起の下で両側から割り込んだ形状としており、その上側は突帯の幅を広げて突出させている。また、小口の突帯はそうした形状に加えて突起の上下で突帯の中央をくぼませて二つの細い突帯とし、上端で

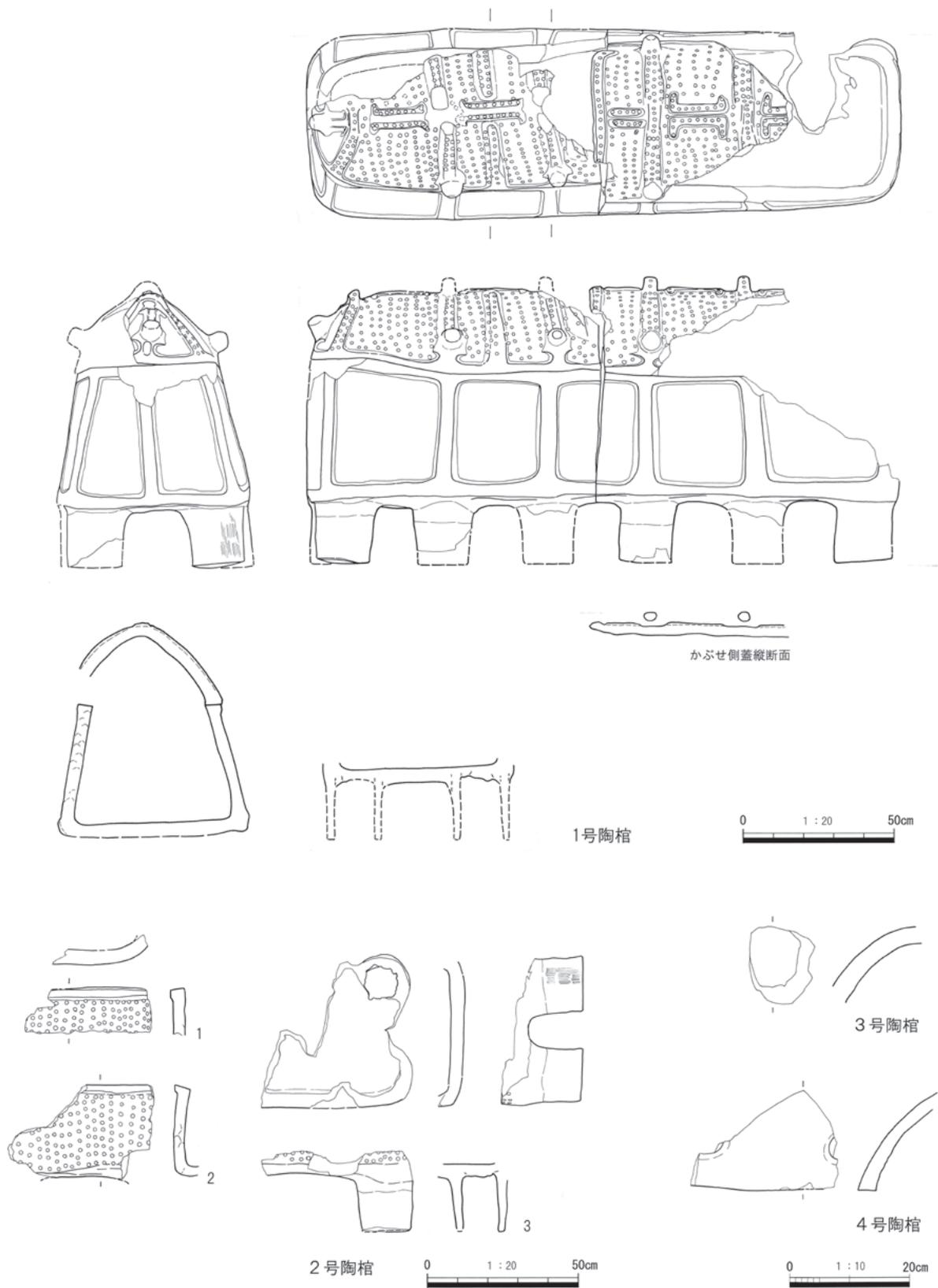


图2 定国古墳出土陶棺 1 : 20、1 : 10

は斜めの短い突帯を付けて矢印に似た形にしている。

蓋の稜線部分には陶棺で通常見られる突帯はなく、かわって棒状で両端を短く外に突出させるコ字形の浮文を二個一対で間隔をとりながら配している。この先端を折って突出させる形はこの陶棺の基本的な意匠のようで、かぶせ部の突帯や前述の小口部の突帯も同じ形である。頂部には軸線と直交の方向に環状の把手を設ける。把手の基部は突帯の上端に貼り付ける。

こうした浮文や突帯を含めた蓋の全面に竹管文を配している。ただし、小口面と突起には竹管文を入れていない。竹管文は直径一三mm、厚さ二mmである。直径がこれよりもやや大きい箇所もあるが、圧痕であるため押し方や器表の乾燥状態で若干差を生じたとみられる。施文は縦方向に連なる傾向があり、縦の列を配する形で施文したようである。竹管文の密度は立面を示した側が高く、反対側は若干まばらな箇所があり、陶棺の正面は立面図側であった可能性がある。

蓋の切断面は高い位置まであるが、それを覆ってかぶせ部が設けられるのは石山四号墳陶棺と同じである。かぶせ部の内面には粘土の接着を防いだ木葉の圧痕がよく残る。

蓋の内面調整はナデで、粘土接合痕を消している。かぶせ側の立面図側にはすり鉢形の封じ孔があり、直径六cm程度の内底に粘土を詰めて封じる。この粘土の内側表面は外から詰めた粘土の状態ではなく、ユビオサエが加えられている。

以上のように、一号陶棺は竹管文、浮文、突帯の削り込みな

ど、装飾性がきわめて強い点が特色であり、類例は見当たらない。蓋頂部のコ字形の浮文については、建物の屋根装飾を表現したとも見えるが、かぶせ部突帯が共通することから必ずしもそうとは言いにくい。

美作四突起系陶棺に分類され、突起と突帯の関係は連結系である。

二号陶棺

身の一部が遺存する。身の推定幅五一cm、資料2・3による復元高さは五〇・四cmと、一号陶棺よりも小形である。しかしながら脚の直径や底面の厚さは一号陶棺と遜色ない(表1)。破片1は身上端であるが、身の隅の平面形は丸みが強い。脚は二行で狭い間隔で配される。一方、側面側については底面の形状から推定するしかないが脚基部の間隔は約三〇cmと一号陶棺よりも大幅に広い。六列に復元した場合は一号陶棺を大きく上回る長さになるため、類例はないが四列になるのかもしれない。身・蓋合わせ部の突帯は設けられているが細く、縦方向の突帯が全くない。そして、身全体に竹管文が配されている。

竹管文の直径は一三mmで、一号陶棺のものとほぼ等しい。特徴がほとんどないため判断しがたいが、一号陶棺と二号陶棺で施文原体が異なるとは言いがたい。脚外面の粗いタテハケについても差は見出しにくい。

小形化しているが、二号陶棺は一号陶棺と同時とは言えないにせよ、近接した時期に製作された可能性を考えることができ

る。

三号陶棺

胎土・色調で他と区分できる破片数点がある。図示した蓋は厚さ三・二cm前後である。これ以外に脚基部の一部が残る底部破片があり、正確な推定はむずかしいが脚基部間の長さは一〇cm程度とみられ、脚が二行と想定した場合の身幅は五〇cm程度になる。二号陶棺とほぼ同じ幅となるが、全体に薄手である。また、行方向の脚間隔は広いようである。色調は一般的な土師質亀甲形陶棺と同じである。

四号陶棺

蓋と底部の破片少量からなる。図示した蓋には差し込みの突起が剥脱した痕跡が残る。突起の間隔は約二・八cmと狭い。また、厚さも二・〇cmと薄い。蓋の下端に突帯は設けられておらず、突起付近の状態から縦方向の突帯もない可能性が高い。下端面は小さい凹面が連なって波打つような面となっており切断で形成されたとみられるが、ナデが加えられている。身底部の破片は比較的大きな破片であるが、脚基部の一部が破片隅に残るにすぎない。厚さは二・八〜三・〇cmと薄く、砂粒が比較的少ない胎土である。この破片からは残存長さか

表1 定国古墳陶棺の法量

	底部厚さ	脚径	脚厚さ	脚基部間隔
1号陶棺	4.5	18.8	2.6	16
2号陶棺	4.3	19	2.7	30
3号陶棺	3.5	20.2	1.9	16以上
4号陶棺	2.7	16.8	1.9	28以上

ら身の幅は三五cmよりも大きいこと、行方向の脚基部間隔は二八cmよりも広いことがわかる。

また、底部破片には粘土接合部が見られるが、接合痕は長く他の陶棺とは底部形成手法が異なる可能性がある。

五号陶棺

館蔵資料に破片はないが、美咲町教育委員会蔵資料には以上とは異なる破片があり、五号陶棺とする。蓋小口部の破片で、縦の突帯は下縁の突帯に達し、小口中央の縦突帯上に円柱状の突起を設ける。この個体では全面に櫛状工具による波状文を施す。図は『中央町誌 資料編』（美咲町史編さん委員会ほか二〇二〇）からの転載である。

陶棺の先後関係

以上五個の陶棺の時間的關係であるが、突帯がなく小形の四号陶棺を最も新しいとみてよい。それに先行するのは比較的小形の二号陶棺と三号陶棺となるが、上記のように一号陶棺と二

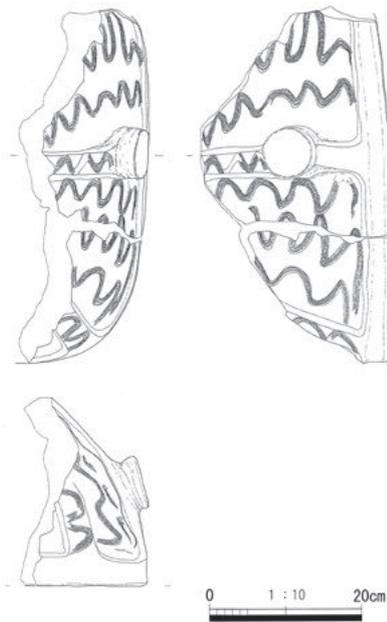


図3 定国古墳5号陶棺 1:10

号陶棺の製作時期が近接するとすれば、三号陶棺が二号陶棺よりも新しくなるだろう。

五号陶棺には波状文が施される。波状文をもつ陶棺は赤磐市土井遺跡二号窯陶棺、畑古墳一号陶棺など備前地域に資料が集中しており、それらは備前A系陶棺としてまとめられている。美作地域の陶棺で波状文をもつものとしては鏡野町長浜二号墳陶棺があり、これは備前A系陶棺の新しい段階に位置づけられている（鐘方二〇一八）。長浜二号墳陶棺の突起は畑古墳一号陶棺などと同じ鉤状であるのに対し、五号陶棺は突起が美作に特有の円筒形であることから、備前A系陶棺の影響を受けて製作された美作の陶棺であり、TK二〇九型式の須恵器を伴う長浜二号墳陶棺よりも後出すると考えておく。

発掘調査資料ではなく、また、一号陶棺を除いて破片が少ないため推定が多くなるが、五号陶棺↓一号陶棺↓二号陶棺↓三号陶棺↓四号陶棺の順と考える。

竹管文を施す陶棺として、津山市大月古墳陶棺や同荒神西古墳一号陶棺、長浜二号墳陶棺などが知られるが、一号陶棺ほどに装飾に富んだ資料は見られず、環状の把手は類例がない。あえて系譜を追うとすれば、現在知られる資料では波状文に加えて竹管文を多数配する長浜二号墳陶棺が近いと言える。美作系陶棺の中に装飾性が強い備前A系陶棺がもたらされ、その影響を受けて美作の陶棺工人が新たな意匠の創出を試みたのかもしれない。

定国古墳資料は古墳時代後期に盛行する陶棺のうち、七世紀前半からおそらくは後半に及ぶものからなり、陶棺の形態変化の後半・終末段階資料がまともと言える。二号陶棺の諸特徴にもとづけば、小形化がまず生じ、それを受けて器壁と脚が薄手になるとすることができる。なお、陶棺の脚はゆがみが大きいため、表1に示した脚直径は一応の目安である。また、脚の厚さは上端付近での値である。二号陶棺以降の資料はいずれも縦断方向の脚の間隔が広いが、そうした例は現状では他の古墳の資料には見られない。一号陶棺、それに続く二号陶棺の独自ともいえる装飾性の出現とあわせれば、陶棺が地域的に展開し個性を発揮すると言うことができる。陶棺の製作と供給の範囲が狭かったことを示す可能性がある。

三 若干の所見

以上、備前の陶棺と美作の陶棺資料の紹介を行ったが、復元や実測での所見を記してまとめとする。

第一点は、石山四号墳陶棺蓋の器壁中に見られる細竹等の痕跡である。縦横に粗く組んだ細竹あるいは葦等の植物を蓋を製作する際の骨組みとした可能性が強い。器壁が厚くドーム状になる蓋の形成に有効であったと思われるが、美作地域の定国古墳陶棺ではこの手法は認められない。陶棺に破損がない場合には当然確認できないわけであるが、これまでの資料報告にもそうした記載は見られない。同様の痕跡があるのは赤磐市畑古墳

三号陶棺であり、現状では赤磐市南部の二例に限られており、赤磐市域では美作地域と異なる製作技術が編み出された可能性が考えられるが、これについては今後検証していく必要がある。陶棺の製作手法についてはおおむね解明されているとはいえず、細部については地域的な差がある可能性がある。破面の詳細な観察が必要である。

もう一点は黒色顔料についてである。ここに示した資料のうち、石山四号墳陶棺、定国古墳一号陶棺、同二号・同四号陶棺には黒い汚れが見られる。石山四号墳陶棺の場合、黒色は底面を除く外面全体に見られるが、黒色が薄く汚れと呼ぶのがふさわしい状態と言える。黒色が外面よりも濃いのは身の内面上部、身の水平切断面、蓋内面であるが、それが見られる範囲や黒色の濃さは異なる。これらのうち最も黒色が濃い身内面の上部では、黒色範囲は端が明瞭な境界をなし黒色の液体がかかった状態を示している（写真2）。なお、この部分は薄く土をかぶっており、出土時の状態をとどめる。また、写真3には定国古墳二号陶棺身内面を示したが、ここでも濃い黒色が見られる。この資料では黒色部分の上を水が伝い部分的に黒色が流れ落ちた状態が見られる。これらから判断できるのは、黒色は汚れではなく黒色の顔料であること、それは漆や膠といった顔料を固定する成分をほぼ含まず、たとえば炭の粉を水で溶いて塗るといったものと推定できる。そのため、外面から身内面上部にわたって顔料が塗られたものの、天井石から落ちる水などにさらされ

る外面では総じて遺存状態が悪く、陶棺が破損しない限り最も環境が良い身内面によく残ることになったとみられる。

なお、石山四号墳陶棺底内面は全体が暗灰色であるが、その一部には長径一五cmの広がり最大五mmの厚さに炭粒が固着しており、顔料の一部の可能性がある。また、定国古墳二号陶棺では底外面にも黒色顔料が認められる。

これまでに黒色顔料の存在が指摘されたのは真庭市定西塚古墳一号陶棺蓋の同心円文装飾部分であり、同二号陶棺について黒色顔料塗布の可能性が指摘されているにすぎない（新納・光本編二〇〇一）。しかし、黒色部分を観察できる陶棺が圧倒的に多いことは、たとえば津山郷土博物館特別展図録『土の棺に眠る』掲載のカラー図版を見れば明らかで、赤磐市畑古墳一号陶棺以下数多くが認められる。陶棺表面の黒色部分が顔料として認識されてこなかった理由として、陶棺は赤い棺であると認識されてきたことがまず挙げられる。さらに、マンガンの沈着や土の付着等による汚れと類似しており場合によっては弁別しがたいことや、破面にも黒色が付着する場合があることなどがあるが、後者については顔料が流れて二次的に付着したと理解することができる。

ここで紹介した備前、美作と地域を異にする資料に加えて多くの例を見出すことができ、黒色顔料の塗布は吉備の陶棺の基本的な属性と考えるが、一方で、白色の顔料で文様が描かれる美咲町唐臼一号墳陶棺や、赤色顔料の塗布が観察されている定

西塚古墳四号陶棺、同六号陶棺も知られ、すべての陶棺が黒色顔料塗布でなかったことも確実である。陶棺の顔料塗布が時期的、地域的にどのように変化するか把握することにより、葬送思想の共有や小地域性の出現を考察することができる。また、同時期の一般的な棺である木棺が遺存することはないが、その装飾がどのようなものであったかを陶棺から推定することが可能となる。

定国古墳一号陶棺のうち、十分に水洗いがなされたとみられ土の付着が少ない図右半では黒色顔料の付着はわずかしか見られない。発掘調査で陶棺が出土した場合には、水洗に先だって表面の十分な観察が必要である。

《参考・引用文献》

赤磐郡教育会編一九四〇『改修赤磐郡誌』

鐘方正樹二〇一八「吉備地方の土師質亀甲形陶棺と埴輪」『埴輪論叢』第八号埴輪検討会、一〇一―一八頁

絹島 歩二〇一六「吉備」地域における陶棺の採用過程とその論理」『考古学は科学か』（下巻）田中良之先生追悼論文集、六九七―七一六頁

久米郡教育会編一九二三『久米郡誌』、一四七、一五三頁

神原英朗一九七七「石山古墳群第六号墳」『日本考古学年報二八（一九七五年版）』日本考古学協会、二三―一二三頁

神原英朗一九七八「石山第四号古墳」『日本考古学年報二九（一九七六年版）』

日本考古学協会、二三九頁

杉山尚人一九八七「陶棺の研究」『考古学研究』第三三卷第四号、四九―七一頁

豊島雪絵・平井泰明編二〇一三『土の棺に眠る―美作の陶棺―』平成二五年度特別展図録 津山郷土博物館

永山卯三郎一九三〇『岡山県通史』上編 岡山県、二六一、三〇六頁
新納 泉・光本 順編二〇〇一『定東塚・西塚古墳』岡山県北房町教育委員会

西川 宏・則武忠直一九五八「備前山陽町吉原古墳群の陶棺」『古代吉備』第一集、一四―三〇頁

美咲町史編さん委員会・中央町誌編集委員会編二〇一八『中央町誌 地区誌編』

美咲町、八三九頁

美咲町史編さん委員会・中央町誌編集委員会編二〇二〇『中央町誌 資料編』

美咲町、三三―三八頁

村上幸雄・橋本惣司一九七九「亀甲形陶棺の製作工程について」『考古学研究』

第二六卷第二号、七三―八一頁

村上幸雄・杉山尚人一九九二「集成一六陶棺」『吉備の考古学的研究』山陽新聞社、六八七―六九九頁